

2/21 ヨハネの福音書5章1－9節「絶望に勝つ主のことば」

小池 宏明 牧師

* 絶望の中にいる病人

ベテスダとは「いつくしみの家」という意味である。ベテスダと名付けられたこの池の回廊にたくさん伏している病人がいた。その中から主イエス様が目を留めた人物は、38年間も寝たきり状態の男だった。一口に38年と言うが相当長い年月である。6、7節「イエスは彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしていることを知ると、彼に言われた。「良くなりたいか。」病人は答えた。「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます。」この男には、身寄りがなく、友達もいなかったのである。私たちは、病気の時、体を痛めた時、心に厳しい戦いが起きる。「なぜなのか？」神も人も恨むような葛藤が起こるだろう。「いつくしみの家」と名づけられたこの回廊は、実は「絶望の家」だったのかも知れない。この病人の姿は、私たちの姿ではないだろうか。信仰を働かせるのではなくて合理的な生き方、考え方に憑り付かれている私たちではないだろうか？自分で限界を定めて、その範囲で自分ができることを、祈り求めているだけではないだろうか？

* 一方的に罪人を選び出し、救い出す主のことば

しかし、主イエス様は、私たちの現実を、ものともせず、御業を成される。それゆえ、私たちは自らの不信仰が、いかに大きな病なのか、明らかにされているのだ。8、9節「イエスは彼に言われた。「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」すると、すぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。」主イエス様が命じた「起きなさい」は復活のことばである。主は21節のように語った。「父が死人をよみがえらせ、いのちを与えられるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。」

この男が、強い意志を持って、「治りたい」、「救われたい」と願ったから回復したのではない。この男は、生きる意欲さえ失って、絶望の淵にいたのだ。そして、「良くなりたい」と口にすることはなかった。しかし、心の奥底では救いを求めていた。自分で気付かなかった。このしるしは、そのことを知っていた主イエス様の一方的な選びによる。この男の意欲ではなくて、主のことばが勝利したのだ。主は、御心になんて、ご自分が「救い出したい」と思う者にいのちを与えるお方である。主は、絶望と悲惨の淵からでも、憐れもうと思ふ者を、立ち上がらせてくださる。

今日、改めて、主が一方的に私たちを選び、救い出して下さった恵みを覚えて感謝したい。